

## 現代におけるミャンマー仏教徒の信仰と儀礼

ティンマーウー

### 序論

ミャンマー仏教徒は一人で二つの面を持つ。一つは仏教徒としての、もう一つは土着の信仰を奉じるミャンマ一人として的一面である。彼らは仏教徒として、布施したり、戒律を守ったり、瞑想を行ったりすることで涅槃を目指し、あるいはより良き来世のための積善とする。その一方、土着の思想や伝統的な習慣を尊重するミャンマ一人として、現世の幸福のため、もしくは占いを信じ厄払いなどをすると、その中には迷信的なものも多い。

そのような仏教徒をミヨー・パラー・ブッダバーター (Miyo Phalar Buddha Bhāsā 家系の仏教徒) という。仏教国でありながら、ミャンマーではタケッ・ブッダバーター (Talge Buddha Bhāsā 真実の仏教徒) が少なくなっている。グローバル化する世界の中にあってミャンマー仏教の在家信者は、先ずは「真実の仏教徒」にならなければならない、もしくはそれが何かをはっきり知らなければならないと筆者は個人的に考えるが、そこでミャンマー仏教徒の在家信者の信仰を考察することによって、ミャンマー仏教徒の将来の展望も開けてくるであろう。ここでは現地の仏教徒の状況、特に在家信者の信仰形態を文献資料とフィールドワークの調査成果に基づいて報告し、僧伽 (Saṅgha) と在家信者との関わり方を論じていきた

ミャンマーでは仏・法・僧の三宝に、親・師を合わせた「アナンドー・アナンダ・ンガーパー (Anando ananda ngapar 限りなく大きな五徳 )」という信仰と儀礼がある。在家信者は日常生活において三宝を供養し、親・師に礼節を持って接することを心掛けて暮らしている。従って、アナンダ・ンガーパーである三宝と親・師に関する儀礼をそれぞれ別個に扱わなくてはならない。それには、それぞれの信仰と儀礼ごとにモノグラフを作製し、詳細に記述しなければ、ミャンマー仏教を知らんとする人々が完全に理解し、論議することができないと考える。

### 問題の所在

仏教を信仰して、その儀礼に参加し三宝を供養しながら、同時に民間信仰も信仰しその儀礼を行っているのが、ミャンマー在家仏教信者の大きな問題であり、ミヨー・パラー・ブ

ッダバーター（Miyoe Phalar Buddha Bhāsā 家系の佛教徒）とタケッ・ブッダバーター（Talge Buddha Bhāsā 真実の佛教徒）の思想を比較し、そこでどのような関連性があるのかを検討していく必要がある。在家信者の間で見られる様々な習慣や作法の中には、佛教に由来するものと土着信仰に由来するものとが分かちがたく混在している。それらを注意深く観察し分析していく。

### 研究の目的

本研究はミャンマー佛教と在家信者について史資料、フィールドワークや自身の生活経験に基づき、できるだけ具体的な事例を挙げて明らかにしていくものである。つまり、在家者の佛教文化にかかわる日常生活と非日常生活で行われる儀礼、そして信仰形態をあきらかにすることが最大の目的である。僧伽と在家信者との関わりについては副次的に扱う。また在家者の民間信仰についても触れたい。

ミャンマー佛教信仰と儀礼をフィールドワークの対象とした理由はいくつかある。ミャンマー在家信者自身が殆どこれらについて研究しておらず、その他の佛教国でも同様の事態が見られるように、ミャンマーの在家信者は佛教徒と言しながらミャンマー土着のその他宗教を同時に信仰しているなどの現状がある。従って、このような佛教徒の存在を調査、研究することによって、より客観的にミャンマー佛教についての理解を深めることができると考える。本研究の成果としては、ミャンマー佛教の在家信者の信仰を考察し理解することにより、ミャンマー佛教徒の将来の展望も開けてくることが期待される。

### 研究方法

本研究では、現地の寺院などを訪問して僧などその関係者に聞き取りを行い、寺院の機能や僧の役割など基本的な情報を集めたデータと、フィールドワーク調査成果に基づいたデータとインタビューによるデータを主に纏めた。それらのデータを元に、現地の佛教徒の状況、特に在家信者の信仰形態と社会活動を報告する。そして、僧伽と在家信者との関わり方も充明する必要があると考える。また、ミャンマー在家信者の信仰形態を述べるには、佛教だけではなく、視野を広げて他の宗教からの影響を分析しなければならない。現地調査は、大学が春季休暇期間の2月、3月の間と夏季休暇期間の7月、8月の間に2017年から2021年の5年間かけて行った。ミャンマーのマンダレー管区を中心に、できるだけ多くの地域や寺などを廻りながら基本的な情報を集めた。

また、ミャンマーでは僧の説法をCDで聞く習慣があり、僧の説法に関しては書籍よりも

しろ CD の方がよく使われている。このため筆者の研究でもそうした CD 資料を収集し分析を試みた。

2017 年および 2018 年は、在家者の仏教文化にかかわる日常生活、年中で行われる儀礼、信仰形態について研究した。また、出家者の托鉢、僧院生活について現地調査が出来た。現地の寺院などを訪問して僧等の関係者に聞き取りを行い、寺院の機能や僧の役割など基本的な情報を集めることができた。

2019 年は、通過儀礼としての出産・命名式・葬式と、靈魂信仰について考察し、それに関するフィールドワーク調査が出来た。また、仏陀への信仰に関するセーティ (Seti 仏塔) やパトー (Puhto 門、回廊を持つ仏塔)、仏像の違いについて学会で研究発表を行った。

2020 年は、阿羅漢信仰について全国学会で発表し、論文を寄稿した。現在存命中の阿羅漢果を得た僧として名声が高まっている僧について、現地で参写観察とインタビューによるデータを集めることができた。

### 研究の意義

ミャンマー仏教徒の信仰と儀礼についての研究は決して多くない。現代におけるミャンマー仏教徒の信仰と儀礼を研究する意義は、文献からは読み取ることの出来ない部分、日本人学者には読み取ることの出来ない部分、出家者と在家信者との物心両面に関わる部分、ミャンマーでしか見られない特徴的な部分などについて明らかにできるということである。また、フィールドワーク等により、仏教文化により深い理解が得られるであろう。

### 各章の構成

本研究では、本論を 7 章立てとして、ミャンマー仏教徒の信仰と儀礼の形態を明らかにした。仏教徒の信仰と儀礼はとても広い範囲になるので、ミャンマー仏教徒の間で最も大事にされているアンドー・アンダ・ンガーパー（三宝と親・師）に対する信仰と儀礼に注目して述べる。まず第 1 章でミャンマーの概要とミャンマー仏教の歴史的背景を述べた。第 2 章から第 4 章までは仏法僧に対する日常生活、非日常生活で行う供養、儀礼について事例を挙げて分析した。第 5 章では親と師に関する儀礼、第 6 章では在家信者の仏教生活に関わる儀礼を述べた。第 7 章では民間信仰に関する儀礼に言及し、結論ではそれらを踏まえて、タケッ・ブッダ・バーター（真実の仏教徒）になることができる手段を考察し、更にミャンマー仏教徒の信仰と儀礼の形態について論じた。

## 第1章 ミャンマーの概要とミャンマー仏教の歴史的背景

ミャンマーの面積、人口、季節、七州と七管区とそこに住んでいる民族などについて述べた。また、ミャンマー仏教の歴史的背景として、ミャンマー仏教の始まりはシュエー・ダゴン・パヤーからだと伝承されているので、シュエー・ダゴン・パヤーの歴史を事例として述べた。また、上座部仏教が導入されたのは、11世紀のパガン（Pagan）時代、アノーヤター（Anawrahta 1044-1077）王の治世であり、アノーヤター王がいかに仏教を受容したかについて詳しく述べた。ついで、仏教信仰の歴史的背景として、仏教に熱心なあまり、国防をおろそかにしたミンドン（Min Don 1853-1878）王について述べた。

## 第2章 仏陀への信仰・儀礼について

仏陀への信仰と儀礼に関する日常生活、非日常生活の現状を示す。ミャンマーには全国何処に行っても「セーティ（Sedi、仏塔）」が数えきれないほどたくさんある。多くのミャンマ一人はそれを心の拠り所としている。仏陀の舍利が安置されているセーティもあれば安置されていないセーティもある。人々がセーティやパトー（Puhto 門、回廊を持つ仏塔）、仏像に礼拝するところをよく見かける。煉瓦で建てた塔を生きている仏陀に対する様に信仰をもって礼拝しているのである。日本の学者の多くはミャンマーのパゴダについて、それらを「寺院」として紹介している。しかし、現地ではパヤー（Phaya）と呼び、仏塔あるいは仏像を中心とした礼拝施設であって、僧は居住しておらず、寺院とは異なる。たとえば、都築治著『パゴダは寺院ではない —パゴダと寺院の違い—』（2013）では、この点を詳しく述べている。本研究では、それらを参照し、セーティ（Seti 仏塔）とパトー（Puhto 門、回廊を持つ仏塔）の違いを述べ、それにかかわりのある仏像についても言及した。更に、当初は寺院として建てられたにも拘わらず、その名称のためにパヤーに変更されたという事例を示す。そして、仏塔の伝来とパヤーの由来を述べた。ここでは、それらを纏めながら、ミャンマー仏教徒の仏陀への信仰の特徴を述べる。

ミャンマー仏教徒は仏塔、仏像を建てるなどして、功德を積み重ねる。それらを個人で建てられなくても、大勢に呼びかけ、寄付金を集めなどして建てるのである。だから、ミャンマーでは例えば「あそこにパヤーがある。」と指せば必ずそこに間違いなくパヤーがあるといわれるほど至るところにパヤーがある。パヤーの境内に入る時は必ず裸足で入る。境内に車で入る場合も、信者たちはその車内で靴を脱いで入るのが普通である。

ミャンマー仏教徒は家を建てる時、一番に考えるのが仏壇のことである。仏壇の位置を決めてから他の位置を考える。仏壇の位置は東側か南側に置く習慣があり、個室で祀られる。

しかし、家の広さや経済的に個室で祀られない場合もある。個室が無理な場合はリビングや寝室などのいずれかの部屋に設置する。また、仏壇の前では、男性は寝転べるが、女性や夫婦は出来ないという考え方がある。仏壇の前では仏陀に礼拝したり、供養したり、瞑想したりすることが多い。

仏壇に安置する仏像の大きさや立派さは経済的に豊かになればなるほど豪華になっていく。仏像は銅で作られ、それに金箔を貼ったものか、大理石で彫刻したりしたものが一般的である。仏像が設置出来ない場合は、少なくとも仏像画を掛ける。仏壇に朝はミャナー・ティトー・イエ (*myant nhar tit to ye* 顔を洗うための水) とトウトー・イエ (*tout to ye* 飲み物としての水) を供える。昼には12時までソントー (*son to* ご飯やお惣菜) とトウトー・イエ を供える。夕方にはミャナー・ティトー・イエ、トウトー・イエと花を供える。夜には経を唱えたりする。仏陀を朝、昼、晩に毎日供養、礼拝する信者も居れば、たまにしかしない人もいる。若い男性に後者のタイプが多い。

ミャンマーには仏陀の遺骨が安置された高名な仏塔が国中に沢山ある。それで、ミャンマー仏教徒は少なくとも年に一回は全国にあるパヤーを回って礼拝する習慣がある。また、誕生日、結婚記念日、満月の日、新月の日などにもパヤーに行って礼拝する。パヤーは若者たちの楽しめる所でもある。

また、日常生活における仏壇の形態、仏壇に安置されている仏像に供養する方法、仏陀に礼拝する意義とその結果などの視点から実例を提示した。

ミャンマーでは十二ヶ月の各月に全国的に行う十二祭りが行われている。その中で仏陀に関する祭りは5種もある。この章では2月・3月・5月・10月に全国的に行う祭りについて現地調査に基づき明らかにした。

### 第3章 法（ダンマ）への信仰と儀礼

仏教徒になるための三帰依とその結果の事例を通して、法（ダンマ）への信仰と儀礼を紹介した。また、在家者におけるティーラ（*sīla 戒律*）、バーワナー（*bhāvanā 修行*）、ウポッ（*Upasatha 布薩*）とその結果については詳しく述べた。

在家者が守るティーラである五戒、八戒、九戒を表に提示すれば以下の通りである。

	五戒	八戒	九戒
1	生き物を殺さない。		
2	盜みをしない。		

3	夫婦関係以外の淫らな情事をしない。		
4	嘘をつかない。		
5	酒を飲まない。	(五戒まで同様)	
6	—	昼以降は食事を取らない	
7	—	踊り、歌、音楽を聞いたり、花飾りを付けたり、香を塗ったり、アクセサリーを着けたりしない。	
8	—	高い寝床や贅沢な寝床につかない。	(八戒まで同様)
9	—	—	あらゆる人に深い友愛の心を限りなく広げること。

戒律は、仏像、仏塔、仏舎利、僧、戒律を守っている者から受けられる。また、パーリ語でなくても、自分らが分かる言語で唱えても受けられる。9番目の戒である四無量心についてはその意義と唱え方を、阿羅漢として高名なタウン・タン・タータナーピュ (Toung Tan Tartanarpyu) 長老の説法を参照して明らかにした。

また、ミャンマー仏教徒は色々なガーター（偈頌）を唱える習慣がある。その中で、昔から人気があるタンボッデ・ガーター（仏陀に礼拝する偈頌）を述べ、その結果を記述した。それに、タンボッデ・ガーターを唱えたことにより危険を免れた事例を紹介した。

パリッタ（護呪）は、命名式・結婚式・葬式など式によって唱えるパリッタが異なるが、比丘を招いて唱えて貰い、食事の供養を捧げる式でもある。また、パリッタを唱える側と聞く側双方に利益があるとされているという。ミャンマーでは、ミャンマーの賢明な賢人によって引用された11種のパリッタが使用されている。それは、以下の通りである。

1. Maṅgala-sutta (吉祥経)
2. Ratana-sutta (宝経)
3. Metta-sutta (慈経)
4. Khandha-sutta (蘊経)
5. Mora-sutta (孔雀経)

6. Vatṭaka-sutta (鶴経)
7. Dhajagga-sutta (旗先経)
8. Ātānātiya-sutta (アーターナーテイヤ経)
9. Aṅgulimāla-sutta (鳶掘摩経)
10. Bojjhaṅga-sutta (軟食経)
11. Pubbanha-sutta (午前経) である。

11 種のパリッタにはそれぞれの効果があり、その効果について記述した。その中から特に興味深い例として 9 番のイングリマーラ・トゥッ (Aṅgulimāla-sutta) を紹介した。更に筆者の母親の経験を事例として紹介した。

他の上座仏教圏でも同様にパリッタ儀礼が行なわれる。ミャンマーでのパリッタは上述の通り 11 種だが、タイ、スリランカ、バングラデシュのパリッタの種類はそれぞれ異なっているのが分かった。

#### 第4章 僧伽への信仰と儀礼

従来の研究として、U San Thin Hlaing 著 *Tātana amwe kan* (『仏教に入門する』) (1994)、宗教省編 *Kappiya koung ta yok* (『良い淨人とは』) (1996)、池田正隆『ビルマ（ミャンマー）仏教徒と生活と信仰』(1998)、等があるが、それらに更なる考察を加える。すなわち、僧伽への信仰と儀礼を研究するには、僧伽の意義・僧院生活・僧の托鉢・僧に関する儀礼などについてそれぞれ分析しなければならない。

僧院に関しては、パリヤッティ・サーティンタイ (Pariyatti-sartintige 教院) とパティパッティ・チャウンタイ (Patipatti-kyaukti 行院) という二種の僧院がある。その中のパティパッティ・チャウンタイについては、ヤックエッ・ポンジー・チャウン (yatkwat pongyi kyaung 街の僧院) とイエッター (Yeik thar 瞑想道場) として分析し、また、僧の僧院生活、剃髪して白衣を着て八戒を守るポー・トゥ・トー (Phoe thu taw) 、比丘が律を守るのを手助けして寺の雑用などに従事する在家信者カッピヤ (kappiya 清淨人) 、八戒を受けて剃髪し桃色の衣を着る女性出家者ティーラシン (Thīla shin 尼僧) などについて、事例を挙げて明らかにした。更に、宗教省の調査報告による 2019 年度のミャンマーにおける出家者数と僧院数を表にして提示した。また、僧の托鉢について四種に分類し、過去に研究者が扱っていない托鉢方法について、現地調査で得られた新しい知見に基づいて考察した。更に、比丘が主宰する在家者の主な儀礼について述べた。ここでは、命名式・結婚式・アテュバチャ (A thu ba cha

葬式)などの人生儀礼に関して、フィールドワーク調査の成果による事例研究として、できる限り実態を明らかにした。

ミャンマー仏教徒は、人生で大切にしている積徳行為としてイエゼイチャ・アミヤーウエー (Yeizet kyat amya wai 水注ぎ廻向) を行う。積徳行為としての布施、三宝への供養、僧院での掃除等は積徳行であると考えられており、その行為の結果について述べ、イエゼイチャの意義と由来を記述した。そして、儀礼などで最終的に行うアミヤーウェーについて述べた。

ミャンマーの各月毎に行なわれる祭りの中で僧に関わる祭りは四種ある。それぞれの季節にそれぞれの祭りがあり、現地状況をふまえ、仏教活動と社会活動における季節祭りについて現地調査に基づき明らかにした。

ミャンマー仏教の特色の一つとして、在家信者達の熱心な阿羅漢信仰が挙げられる。阿羅漢信仰については長い歴史がある。まず、歴史における阿羅漢について述べなければならぬ。ピュー国ハンリン時代、タイエーキッタヤー (シュリークシュートラ) 時代、タトン時代、パガン王朝時代(107-1368)、コンバウン王朝時代(1752-1885)、植民地時代(1886-1948)、独立時代(1948-)などの阿羅漢については文献調査と阿羅漢の遺骨を安置している各地の現地調査により記述し、各時代の阿羅漢僧の特徴について考察した。現在、阿羅漢果を得たとされている高名な僧の僧院を訪れ、来客にインタビューし、そのデータを集めた。阿羅漢に礼拝出来るのは托鉢の時間帯しかなかったが、その阿羅漢僧の特徴である足跡を観察し写真を取ることができた。それらのデータを利用し事例を考察した。更に、阿羅漢であるかどうかを判別する基準については Ashin Zawana 著 *Saññā ti ne Paññā ti* 『想念で知ると知恵で知る』(2008) に述べられている。それを翻訳研究として示した。

## 第5章 親と師に関する儀礼について

親と師に関する儀礼について述べた。命をかけて産んでくれた母親、生活のため努力してくれた父親への恩は山ほどあると言われる。ここでは、親の五つの責任・子どもの五つの責任・子どもが親の恩に感謝し親の面倒を見ること・親の仕事(家事など)を手伝うこと・親の財産を保護することについて記述した。そして、親への恩返しをする方法、親の恩を返す人の利益などについて考察した。

ミャンマーではサヤーの恩を返すため、サヤー・ガットプエ (saya gatop pwe 師礼拝式) をダディンジュ月(10月)とタング一月(4月)に行う。サヤー・ガットプエは、団体でも

個人でも行う。例えば、学校、会社などでは団体で行う。また、個人的に自分が尊敬するあるいは、世話になったサヤーへ米、ピーナッツ油・胡麻油、干物、衣類、果物、お菓子などを差し上げる習慣がある。ここでは、ミャンマーのマンダレー市にある中学校のサヤー・ガットプエについて詳述した。

## 第6章 ミャンマー在家信者の日常作法

どこの国でもテーブルマナーがあるが、国によって異なる。日本では、食事が始まる際に両手を合わせて「いただきます」と言うが「命をいただきます」という意である。一方、ミャンマーでは食事が始まる前に、最初のご飯を最年長に供するウーチャ (u cha) という作法がある。「ウーチャ」の意は「礼拝」に該当するが、ここでは両手を合わせて合掌してご飯を礼拝する事ではない。料理の食器から一番に取ったスプーン一杯の料理を、食卓の最年長者の皿に入れる事である。「ウーチャ」を行ってから食事を始める。そのことについて詳しく記し、ウーチャの由来についても述べた。

ミャンマー仏教徒は寝る前に三宝と親・師に礼拝するように幼い頃から躾けられる。ミャンマーでは三宝に礼拝する場合も、師・親に礼拝する場合も、礼拝方法は同様である。その儀礼と礼拝方法について事例を交えて考察した。

ミャンマーでは出家者と在家者の間の言葉が異なる。例えば、男性の在家者に対して僧はダカ (dāyaka 施主) と呼び、女性の場合はダカーマ (dāyikā 施主女) と呼ぶなどである。それ以外にもいくつかあるので紹介した。

## 第7章 民間信仰に関する儀礼

ミャンマーでは仏教が導入され定着する前に、土着信仰であるミャンマーの伝統的なナッ (nat) 信仰が行われていた。ナッとは一種の精霊であり、日本においては精霊神とか土着神と呼ばれているものである。普通の人間が何かの事件で死んでしまうと、その人は現世に未練を持つことになる。現世に執着した魂は、ナッという精霊神に変わると信じられている。ミャンマーにおけるナッは37人を数える。その37人のナッに関しては、池田正隆『ビルマ仏教』(2000) に詳しく述べられている。37人のナッは、ミャンマー歴代王朝によって不当に殺害され、死後に精霊として崇められている者たちである。本研究では、仏典から物語を取り出し、現在も祀られているナッを事例として提示した。また、ナッ・ガトー (nat ga tor 巫女) について考察した。ナッ信者がナッに聞きたいこと、願いたいことなどを聞き、それをナッに伝え、ナッの回答を信者に伝えるのがナッ・ガトーの役割である。これはナッ・

ガトーでなければ出来ないと信じられている。ナッ・ガトーに自分の将来の事を聴いたり、恋愛・試験・幸福のため聞いたりする。ナッ・ガトーになるには、ナッと結婚する必要がある。本論では、筆者が現地で調査したナッ・ガトーになるためのプロセスを事例として紹介した。

また、レイピヤー (lei-pya 靈魂) 信仰についても記述した。死者が女性で乳児がいる場合は、そのレイピヤー・クエー (lei-pya-khwe 魂分式) を行う。死者の魂から子どもを受け取る式であり、それはその死んだ母親の子どもへの愛着を断ち切って、彼岸へ赴かせようというものである。レイピヤー・クエーを実際に行った家族にインタビューすることが出来た。そのインタビューによるデータと画像を参照しながら、実態を明らかにした。

また、ミャンマーのナッと、タイにおけるやはり精霊であるピーとの違いを述べました。そしてまた、僧のナッに対する見方について考察した。そして、高名な僧に在家者が聞いたナッ・ガトー (nat ga tor 巫女) について質問と回答がフェイスブックに載せられ、在家信者に伝えられている。それを、事例として紹介した。

## 結論

本論は、「アンドー・アンダ・ンガーパー (Anando ananda ngapar 限りなく大きな五徳)」という仏・法・僧の三宝に、親・師を合わせた五つの仏教信仰と民間信仰の観点を提示した。第1-4章までと第7章で明らかにした内容を踏まえ、タケッ・ブッダバーター (真実の仏教徒) になるための手段とそれぞれの章に挙げた布施、供養に関する行為の結果、その結果に関わる信者の信頼の度合をインタビュー調査の成果により検討した。ここではミヨー・パラー・ブッダバーター (家系の仏教徒) とタケッ・ブッダバーター (真実の仏教徒) の思想を比較し、そこでどのような関連性があるのかを検討していく必要がある。在家信者の間で見られる様々な習慣や作法の中には、仏教に由来するものと土着信仰に由来するものとが分かれがたく混在している。それらを注意深く観察し分析した。

ミャンマー仏教徒は第2章から第6章まで述べた通り、仏法僧にも、そして民間信仰の類にも深い信仰心が見られる。ミャンマーでは伝統的に五つの仏教徒という考え方がある。それは、以下の五つである。

- ① クラ・ブッダバーター (Kula Buddha Bhāsā 家系の仏教徒)
- ② ラーバ・ブッダバーター (Lābha Buddha Bhāsā 欲の仏教徒)
- ③ バヤ・ブッダバーター (Bhaya Buddha Bhāsā 恐怖から信仰する仏教徒)

- ④ タダー・アディカ・ブッダバーター（Saddhā adhika Buddha Bhāsā 信仰を重視する佛教徒）
- ⑤ パンニヤー・アディカ・ブッダバーター（Paññā adhika Buddha Bhāsā 智慧を重視する佛教徒）である。

以上の五つの佛教徒の中、クラ・ブッダバーター（家系佛教徒）はミャンマー語でいうミヨー・パラー・ブッダバーター（家系の佛教徒）である。また、タダー・アディカ・ブッダバーター（信仰を重視する佛教徒）とパンニヤー・アディカ・ブッダバーター（智慧を重視する佛教徒）は、タケッ・ブッダバーター（真実の佛教徒）と呼ばれる。それらの区別は普段は分かりにくいのである。ここでは区別を分かりやすくするために、15年前にあった筆者の同級生と筆者の近所の女性の事例をあげる。

その同級生は自分より5歳下のイスラム教徒の男性と付き合い、佛教徒である同級生の家族は厳しく反対した。それで彼女は彼氏と家出した。彼女が家出したので家族は仕方なく、結婚を認めた。そして、家出の一ヶ月後に結婚式を行った。結婚式は午前に行われた。その日の午後には、新郎が、新婦である同級生をイスラム教徒にするための式を行う準備をしたそうである。そこで問題が生じた。家出する前の約束は、自分たちが信仰している宗教は、それぞれ自由に信仰することである。しかし、彼は約束を破って彼女をイスラム教に改宗させる式を準備した。それが分かった彼女は悩んだが、結局離婚を選んだ。朝結婚して午後には離婚した彼女は、後悔しないで今も佛教徒として家族と一緒に幸せに暮らしている。

一方、筆者の近所の女性は、イスラム教徒と付き合ったが、両親には反対されなかった。彼女の結婚はスムーズに行われた。彼女は結婚後、イスラム教徒になった。佛教徒からイスラム教徒になった彼女は、元々イスラム教徒の女性よりイスラム教の戒律を守り過ぎて、近所の佛教徒たちに嫌われるほどだった。

ここでは、両者を比較してみると、前者の両親は佛教に信仰深い家族に育てられて自分たちも佛教を信仰し、修行していた家族であった。それで、自分たちの子どもにも、佛教を信仰するように正しく教え、一緒に説法を聞いたり、仏陀に礼拝したり、瞑想したりしたという。そういう佛教徒は何があつても変わらない。カンマ（業）を信じているタケッ・ブッダバーター（真実の佛教徒）であろう。

後者の家族は佛教徒だが、僧に供養したり、時々戒律を守ったりする程度だそうである。また、経済的に厳しくなったらナックに供養したり、占いを聞いたりするのである。佛教の真

実を理解していないと思われる。だからこそ、簡単に宗教を変えられたと考える。そういう仏教徒はミヨー・パラー・ブッダバーター（家系の仏教徒）であろう。

タケッ・ブッダバーターになるには、本論の 7-3-1. 「僧のナッに対する見方」にも述べたが、サヤートーたちの教えに従うことが必要である。また、五つの仏教徒の中、⑤パンニヤー・アディカ・ブッダバーター（智慧を重視する仏教徒）まで出来なくても、④のタダー・アディカ・ブッダバーター（*Saddhā adhika Buddha Bhāsā* 信仰を重視する仏教徒）になればタケッ・ブッダバーターになれるのである。そこで、信仰を重視するということを簡単に言えば仏法僧を信仰することである。

仏法僧を信仰すると言うのは簡単だが、実際に実践するのは生活場面により中々難しい所がありそうである。それが、ミャンマー仏教徒としての大きな問題である。なぜなら、民間信仰の方が、今日供養したら明日には（遅くとも半年後には）利益が生じると信じられているのである。仏法僧を信仰するご利益も信じているが、そのご利益はいつ得られるか分からぬ（遅い）と思われているからである。ナッ、魂信仰、占い、厄払いなどの民間信仰は現世の利益のため、仏法僧を信仰するのは来世のための信仰になってしまっている。それが、多くのミャンマー仏教徒の現在の問題点である。その問題点を解決するため、信者本人がカンマ（業）を信じる心を持たなければならないと考えられる。

殆どの仏教徒は他人の物を盗むこと、嘘をつくことなどの戒律を守らない悪事だけが悪業だと思われている。仏像の前で無智（avijjā）、欲（tañhā）、見（ditṭhi）から良い来世を念願することはソフトな悪業であることを知る人は少ない。自分たちが過去世で無智が率先して実行したのが集諦（samudaya-sacca）である。その集諦のせいで苦諦（dukkha-sacca）になる。苦諦とは生、老、病、死の苦しみの我々の肉体が証拠であろう。過去世で心の中から業と悪業をしっかりと理解できなかつたので現世の苦諦を得たのである。だからこそ、カンマを信じるには真実と智慧の意味を正しく理解する必要がある。

ミャンマーのある僧団は、仏法僧への信仰と欺瞞的なナッ信仰とを区別出来るように、町々を回って説法をしている。そのお陰でミャンマーでは眞の仏教徒が以前より少し増えてきたと思われる。ミャンマー仏教徒全員が眞実の仏教徒になれば、ミャンマーは平和になり、豊かになるであろうという希望を筆者は抱いている。

仏教国であるミャンマーでは仏教徒の社会福祉活動が年々盛んになってきている。出家者にとって經典の勉強、修行などが最も大事なことだが、多くの比丘が社会福祉活動に参加

している。こうした側面も現在のミャンマー仏教を研究するに当たっては重要な課題である。それらを今後の研究課題にしたい。

#### 【初出一覧】

- ・ 第4章：「ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰—出産、命名式、葬式、魂信仰を中心とした一」、龍谷大学仏教学院生会研究発表、龍谷大学大宮学舎南翼1階、2019年7月
- ・ 第2章：「ミャンマー仏教徒の日常儀礼について—仏陀への信仰を中心として—」、龍谷大学仏教学会研究会発表 龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室、2020年1月
- ・ 第4章. 第7節：「現代におけるミャンマー仏教徒の阿羅漢信仰について」、龍谷大学仏教学院生会研究発表2 龍谷大学大宮学舎南翼1階、2021年7月
- ・ 第4章：「現代におけるミャンマー仏教徒の阿羅漢信仰について」、日本宗教学会発表 2021年9月、於関西大学
- ・ 第4章：「ミャンマー仏教徒の阿羅漢信仰—その歴史と現状—」、『佛教學研究』77, 78合併号 龍谷大学仏教学会学術誌 p. 197-224 (2022年3月)
- ・ 第4章：「ミャンマー仏教徒の儀礼と信仰—僧伽に関する儀礼・信仰を中心として—」『龍谷大学佛教学研究室年報』第26号 p. 169-19 2022年3月
- ・ 第3章：「ダンマ (dhamma 法)への信仰・儀礼について」、『龍谷大学佛教学研究室年報』第27号 2023年 (刊行予定)